2022年5月29日 川越教会

丸山　勉

運任せではなく

［使徒言行録27章21～38節]

人々は長い間、食事をとっていなかった。そのとき、パウロは彼らの中に立って言った。「皆さん、わたしの言ったとおりに、クレタ島から船出していなければ、こんな危険や損失を避けられたにちがいありません。しかし今、あなたがたに勧めます。元気を出しなさい。船は失うが、皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです。わたしが仕え、礼拝している神からの天使が昨夜わたしのそばに立って、こう言われました。『パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ。』ですから、皆さん、元気を出しなさい。わたしは神を信じています。わたしに告げられたことは、そのとおりになります。わたしたちは、必ずどこかの島に打ち上げられるはずです。」

十四日目の夜になったとき、わたしたちはアドリア海を漂流していた。真夜中ごろ船員たちは、どこかの陸地に近づいているように感じた。そこで、水の深さを測ってみると、二十オルギィアあることが分かった。もう少し進んでまた測ってみると、十五オルギィアであった。船が暗礁に乗り上げることを恐れて、船員たちは船尾から錨を四つ投げ込み、夜の明けるのを待ちわびた。ところが、船員たちは船から逃げ出そうとし、船首から錨を降ろす振りをして小舟を海に降ろしたので、パウロは百人隊長と兵士たちに、「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたは助からない」と言った。そこで、兵士たちは綱を断ち切って、小舟を流れるにまかせた。

夜が明けかけたころ、パウロは一同に食事をするように勧めた。「今日で十四日もの間、皆さんは不安のうちに全く何も食べずに、過ごしてきました。だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません。」こう言ってパウロは、一同の前でパンを取って神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始めた。そこで、一同も元気づいて食事をした。船にいたわたしたちは、全部で二百七十六人であった。十分に食べてから、穀物を海に投げ捨てて船を軽くした。

[１]　 「助かる望みは全く消えうせようと」？

使徒言行録もいよいよ来週で最後になります。使徒パウロは、自分は当時の世界の中心とも言えるローマで福音を伝えなければならない、そのために神様は不思議な方法で、迫害の中にあっても自分を護って下さると強く思っていたということが分かりますね。今彼は「囚人」として護送される、地中海を渡る舟に中にいる訳です。それが使徒言行録27章です。この所を読むと、ここは例えば映画だったらかなりのスペクタクルな映像になると思いますが、またこれは、あまり類がない、当時の船旅がいかに大変なものであったかを描写している貴重な文書だと言われています。まだまだ造船技術も航海術も稚拙な時代でありました。それでも当時のローマ帝国支配の経済圏は、エジプトなどともつながり、エジプトからは毎年ローマ市民の4か月分の穀物の供給を受けていたと言います。それに使われていたのが大きな穀物船（貨物船）であったと言うことです。

パウロが乗っていた船というのも、37節に「全部で276人」という人数が乗っていた船だというのですから、かなり大きな穀物船であっただろうと言われます。興味を持って調べてみましたら、当時の舟は大きな帆一つで風を受けて進みます。（絵を見せる）。羅針盤などはありませんで、舟の操作は視覚が頼りでした。この帆船は追い風が吹けば一日に150キロ、風がないときは、25～30キロほど進み、航行速度は風次第でした。また西風が強い地中海の冬は運航を中止するのが当然でしたので、パウロは27章の10節でクレタ島の「良い港」に着いた時にこの先更に進めるのは危険だと忠告しています。彼はこれ迄3度も海で死ぬような経験をしていますから冷静な判断です。けれども、11節を見ると、「しかし、百人隊長は、パウロの言ったことよりも、船長や船主の方を信用した」とあり、出発してしまったのです。

初めのうちは静かな南風が吹いて、これはいいぞと思ったのだと思いますが、事態は急変して「エウラキロン」という暴風が舟を襲ったと言うのです。もうどうすることも出来ず、浮力を維持するために積み荷を海に捨て始め、船具さえ海に捨ててしまいました。もう命の危機に直面させられているのですね。20節にはこうあります。「幾日もの間、太陽も星も見えず、暴風が激しく吹きすさぶので、ついに助かる望みは全く消えうせようとしていた」。

［２］ 「誰一人命を失うものはいない」

そして先ほど読んで頂いた21節以下につながるのですが、これはかなりの緊急事態のことが書かれているようでありながら、実は私たちの人生のことを語っているように思います。私たちの人生も、もしかしたらただ「風まかせ」ということになってしまっていることがあるのではないか、と思うのです。クリスチャンも要注意だと思うのです。「聖霊の奇しき導き」というのを信じるのは大事だと思うのですが、「浮足立たない冷静さ」とか「慌てない準備」というのはやはり大切なのだと、これは、私自身についても本当にそう思います。（毎週の説教の準備についてもそう思うのです）。私たち、「風まかせ」のように「運命」に身を委ね、「運がいい」・「運が悪い」と言ってしまうことがあるかも知れませんが、それは信仰的な言葉ではないと思うのです。イエス様が私たちを捕えて下さっている、というというのは、運命的なものには振り回されない人生を頂いたということです！私たちは決して「運命」には支配されません。確かにパウロがそうであったように、神様イエス様を信じたからと言って、危機的なこと、大波に飲み込まれてしまいそうになることがやってこないなどということはありません。神様はそのようなことは約束されてはいません。そうではなくて、そういう中でも‟生きることを諦めてしなわない力”が聖霊により注がれるのだと思います。パウロの手紙の一つである「テモテへの手紙二」の中にはこのような言葉があります。「神は臆病の霊ではなく、力と、愛と、思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです」（1:7）。このみ言葉を今週心に刻んでゆきたいと思います。

「海の上を進む舟」は、私たちの人生と言えると思います。一つにはそれは、「死」と常に隣り合わせです。普段（凪の時）は忘れがちになっているだけのことですよね。そしてまた、海の上を進む舟というのは「教会」でもあります。先ほども申しましたけれども、この舟には276人もの様々な立場の人々が一緒になっています。読んで頂きましたが、パウロはこの望みが全く消えたような人々に向かって、「元気を出さない。船は失うが、あなたがたは誰一人命を失うものはいない」と語りました。これはパウロにとって、「そうであればいいなあ」という願望ではありませんでした。ここが凄い所ですね。神様がパウロに言ったことが根拠になっているのです。「神からの天使が昨夜わたしのそばに立って、こう言われました。『パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。神は一緒に航海している全ての者を、あなたに任せてくださったのだ』。ですから、皆さん、勇気を出しなさい。私は神を信じています」と。凄いですね。「一緒に航海している全ての者」です！神様の救いは「全ての者」のためです。神様は、神様に捕らえられた者をお用い下さって、全ての者が神の平安の中に支えられるように御計画を進めて下さるのです。暴風雨の中にあってもです！それをあなたは信じられますか？と問われています。

［３］ 舟の上での「主の晩餐式」

ですから、パウロはこの舟の中で何をしたのか。ただ‟言葉”だけではありませんでした。考えてみたら彼は囚人の一人なのです。でもいつしか彼は頼られているのです。神共にいて下さっているからですね。30節には、この舟の中にいては危ないと夜明け前にこっそりと船員たちが小舟を出して逃げ出そうとしたというのですが、パウロは、百人隊長や兵士たちに「あの人たちがいなくなったらあなたがたは助からない」と言い、それを受けて兵士たちは小舟をつなぐ綱を切って流してしまったというのです。ですから、今夜が明けて全ての者がこの舟の上に残っている、そこでパウロがしたことは、一緒に食事をすることでした。「今日で十四日もの間、皆さんは不安のうちに全く何も食べずに、過ごしてきました。だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません」。「あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません」―イエス様の言葉（マタイ10章）を彷彿とさせます。そして、パウロ自身がホスト役になって食事を分けるリードをしました。「パウロは、一同の前でパンを取って神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始めた。そこで、一同も元気づいて食事をした」。皆さんもお思いになるでしょう。これはそのまま「主の晩餐式」の所作ですね。そうです、パウロは、ここに主イエスが生きておられるという現実を深く信じて、落ち着いた冷静さを持って、主の食卓を想起し、それを行ったのです。皆がそれで満たされた。ここには囚人たちがいます。異邦人の百人隊長も、兵士たちもいます。船員も、貿易の人も、またこの記事を書いたルカもいました。皆が、パウロの主にある呼びかけに一つとされています。ここに「教会」が現れているように思います。276人全員が救われたのも奇跡ですが、この舟の上での食事会・ひいては晩餐式の執行も奇跡ではないでしょうか。

そうです！主が私たちの人生に「同船」して下さっていると言うことは、私たちを滅ぼすためじゃない、試練の只中でも、主のご栄光を見せて下さる。あの十字架と復活の主が、私たちをどこまでも支えて下さるという「現実」を見せて下さる、ということではないでしょうか！「だから恐れるな」と、パウロも語りました。信仰者とは運まかせではなく、生ける主に信頼して生きる人です。祈る人です。周りとの関係の中に、主の姿を見る人です。パウロのごとく、そうあらせて頂きたいです。主に信頼しながら、ご一緒に歩んで参りたいと思います。来週はもう6月を迎えます。27章44節。「このようにして、全員が無地に上陸した」。お祈り致します。

主なる神様、早いものでもう5月も終わろうとしています。これまでのあなたの御守りを心から感謝致します。私たちは日ごとに前に進まなければなりません。しかし、人世のかじ取りをするのは、私ではなく、主なるあなたです。どうか、たとえ暴風雨の中にあっても、冷静に、落ち着いて、あなたの御わざを想起し、既にあなたの大きな救いの中にいることを覚えさせて下さい。また私たちは「運命共同体」ではなく、「主の晩餐を囲む共同体」であることを感謝致します。どんな時も、主の十字架と復活の大きな恵みに中に前進させて下さい。「全員を無事にみ国へと上陸」させて下さい。今起こっている人間同士の愚かな争いを早く終えさせて下さい。私たちの罪をお赦し下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。